

中学生が沼にはまる本気のSDGs

—総合的な学習 50時間の挑戦—

神崎 友子

Serious SDGs that make junior high school students fall into the swamp
-Period for Integrated Study 50 Hours of Challenge-

Yuko KANZAKI

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第6号 (2024年1月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.6 (January 2024)

中学生が沼にはまる本気のSDGs

—総合的な学習 50時間の挑戦—

神崎 友子

(京都教育大学附属桃山中学校)

Serious SDGs that make junior high school students fall into the swamp
—Period for Integrated Study 50 Hours of Challenge—

Yuko KANZAKI

2023年8月29日受理

抄録：2022年度の本校の総合的な学習において、SDGsをテーマにしたコースでの探究活動について論考する。学習指導要領や「令和の日本型学校教育」の「個別最適な学び」と関連させ、学びの目的を明らかにし、探究のプロセスに沿って協働的に取り組んだ。「総合的な学習の探究活動として、SDGsに取り組む意義」について、生徒の姿や記述した内容から、昨今求められている資質・能力と合わせて整理した。「社会の当事者と関わり、リアルな状況の中で試行錯誤しながら、協働的に最適解を生み出すことができる」など、今後の中学校におけるSDGsや探究学習の基礎となる知見と成果を得られた。また、SDGsを身近に引き寄せるために新聞を活用し、様々な社会問題への認識を深め、探究の動機づけとすることができた。

キーワード：総合的な学習、SDGs、探究、中学生、協働的な学び、新聞活用

I. はじめに

本稿では、総合的な学習（年間50時間）で、SDGsをテーマにしたコース（Hello Newspaperコース）（1～3年生：16人）の探究活動について論考する。SDGsは近年社会的に注目され、学校現場でも教育活動として取り上げられることが多くなった。しかし、SDGsといっても、取り組みを始める生徒にとっては、どんなことができるか、想像がつかないことも少なくない。そこで新聞を活用し、17の目標とつながる記事をスクラップし、ヒントを得させた。また、ゴールとして「こんなことがわかった」だけでなく、「どんな行動をして、どう変えたいか」を明らかにした上で活動を開始した。

実践の内容については、試行錯誤しつつ、ユニークな学びがあった2グループについて述べる。最後のまとめとして、今回の一連の活動から見えてきた「総合的な学習の探究活動として、SDGsに取り組む意義」について提案する。

1. 本実践と最近の教育動向との関連

(1) 「学習指導要領改訂の考え方」より

図1の平成29・30年版学習指導要領における「学習指導要領改訂の考え方」では、『社会に開かれた教育課程』の実現が明示されており、学校内だけで完結しない、社会とつながりながら学ぶことが求められている。

(2) 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」より

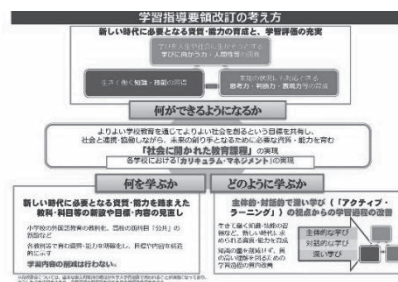


図1 学習指導要領改訂の考え方

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、第I部総論「1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力」¹について、次のように示されている。

一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

これより、多様な人と協働しながら社会の変化を乗り越え、SDGsの実現をめざす生徒を育てていくことの必要性が読み取れる。

また、同答申の「3. 2020年代を通して実現すべき「令和の日本型教育」の姿」²について、次のように示されている。

- ①「個別最適な学び」の「学習の個性化」
- ・子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する
- ②「協働的な学び」
- ・教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での活動など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる
 - ・同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

ここでは、特に生徒の興味・関心に応じて、一人一人に応じた学習活動を提供したり、地域社会での活動やリアルな体験、異学年間の学びが求められているということに着目したい。

このような学びを実現するために、地域での活動や異学年での取り組みが可能な総合的な学習の時間に本実践を行うことにした。

また、「Society5.0」では、「Society5.0に向けた人材育成」の「2. Society5.0における学びの在り方、求められる人材像」³で、次のように示されている。

- <学校が変わる、学びが変わる>
- ・一斉一律の授業
→個人の進捗や能力、関心に応じた学びの場へ
 - ・同一学年集団の学習
→同一学年に加え、学習到達度や学習課題等に応じた異年齢・異学年集団での協働学習の拡大
 - ・学校の教室での学習
→大学、研究機関、企業、NPO、教育文化スポーツ施設等も活用した多様な学習プログラム
- <共通して求められる力>
- ・文章や情報を正確に読み解き対話する力
 - ・科学的に思考・吟味し活用する力
 - ・価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力

今回の総合的な学習の活動やそこから得られるであろう資質・能力と、上記のSociety5.0における「学び方の変化」や「共通して求められる力」に親和性が期待できるため、このビジョンも踏まえて実践することにする。

2. 本探究活動の進め方

本探究活動は、次の①～⑥の順序により、異年齢で協働的に取り組んだ。

- ① テーマのヒントを得るために新聞を読む。
- ② 「SDGs と関連がある」と思う記事をスクラップし、メモする。
- ③ テーマ決定のツールとして、ICTを活用する。ロイロノート
のシンキングツールを使い、思考を可視化する（図2）。
- ④ 次の4つの項目に沿って、プレゼンのパワーポイントを各自
で作成する。

- ・ 取り組みたい研究のテーマ
- ・ 取り組みたいアイデアと SDGs の目標
- ・ どんな行動をしたいか
- ・ その行動でどう変えたいか

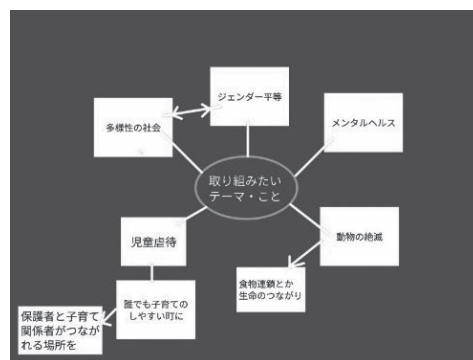


図2 生徒のマッピング例

- ⑤ コース内でプレゼンし、質疑応答する。
- ⑥ 投票で4つのプロジェクトに絞る。プロジェクトに選ばれた人は、そのプロジェクトのリーダーになる。プロジェクトに選ばれなかった人は4つのプロジェクトで、参加したいプロジェクトを選び、参加する。

II. 実践の内容

ここでは、コース内で試行錯誤しつつ、ユニークな学びがあった2グループの活動について、「1. グループAの活動」、「2. グループBの活動」に分けて述べる。

1. グループAの活動

(1) 活動の概要

グループAの生徒が発案したテーマ、SDGsの目標、ヒントを得た新聞記事、どんな行動をしたいか、その行動でどう変えたいか、といった活動の概要を記す。

1. テーマ

「子育てしやすい環境づくり」

2. SDGsの目標

- ・ ③すべての人に健康と福祉を
- ・ ⑩住み続けられるまちづくりを

3. ヒントを得た新聞記事

埼玉県で3歳女児 母親による虐待 骨折を放置され、脳の損傷で死亡（2022年5月31日 朝日新聞）

4. どんな行動をしたいか

「子育てに悩んでいる人達のお手伝いをする」

- ①アプリやイベントを通して、情報共有の場を作る。
- ②誰もが安心して子育てができる場を作る。

5. その行動でどう変えたいか

- ①誰もが子育てしやすい環境を作る。
- ②子育てしている人の悩みを少しでも解決する。
- ③みんなが安心して子育て出来るようにする。
- ④子育てしている人と子育て支援をつなぐ。

グループAでは、母親による子どもの虐待死の新聞記事から、研究テーマを「子育てしやすい環境づくり」と

し、「子育てに悩んでいる人達のお手伝いをする」ことにした。

今の中学生にとって、スマホは日常的に情報を得たり、簡単な調べ物をしたりするメディアで、便利な文房具となっている。そのような身近なツールを利用して、誰もがアクセスしてお悩みを相談できるアプリの開発を目指した。しかし、アプリの作り方や個人情報の取り扱い、誰が質問に答えるかなど、今の自分達がするには難しいと判断した。保護者を対象としたイベントの開催についても、隣接する附属幼稚園の先生から内容や日程に無理があるということで断念した。

また、「誰もが安心して子育てができる場を作る」ことについても、「誰も」では対象が不明確になるため、「附属幼稚園の保護者や近隣の幼稚園の保護者」というように、「顔の見える相手」に絞るなど、試行錯誤と修正を繰り返しながら取り組む姿が見られた。

(2) SDGsの目標を実現するための具体的な行動

グループAでは、前項のような過程を経て、SDGsの目標を実現するための具体的な行動を、次のように修正した。「本校でお世話になっている保健師の方に協力していただきながら、『子育てパンフレット』を作り、附属幼稚園の保護者に配布する。」

そこで改めて附属幼稚園に行き、副園長先生に自分達の思いや願いを伝えることにした。副園長先生からは、“自分達の思いをポスターに書いて、園児を迎えに来る保護者にアンケートをお願いしてみたら”など、色々なアドバイスをいただくことができた。生徒はこのとき、自分達の思いだけで動くのではなく、先方と協力して提案をしていくことの大切さを学んだという。その後、案内のポスターや回収箱を作り、子どもを迎えに来る保護者に趣旨説明をしながら、子育てアンケートを依頼した。図3は生徒が幼稚園の保護者に子育てアンケートの依頼をしている様子である。



図3 子育てアンケートの依頼をする生徒

(3) 子育てアンケートの整理

幼稚園の先生方の協力と生徒の呼びかけにより、多くの子育てアンケートが集まった。生徒は感動してアンケートの回答に目を通していたが、どうまとめるかわからなかった。そこで、「どう整理すると、『子育てパンフレット』にするときに、読み手が見やすいか」を考えた。話し合いの後、お悩みを種類別に分け、年齢と男女別に整理し、電子データとしてまとめることにした。

次に挙げるのは、生徒が整理した保護者のお悩みの例である。

【仕事】

- ・本当は仕事がしたいのに、幼稚園の送迎が大変でできません。女性の役割を押し付けられていると感じたり、家族の要望と自分の気持ち、子供の存在と何を優先し、バランスをとったらいいのかなど、自分でもわからなくて悩んでいます。専業主婦だから子育てが好きなんだろうと思われがちですが、本当は子育てが好きではないです。(5歳・女兒)

【ご飯】

- ・食事にあまり興味が無いのか、たくさん食べてくれないことと、いすにずっと座って最後まで食事に集中が続かないことです。(5歳・男児)

【生活】

- ・子育てをする中で今とても悩んでいることは、子供は6歳の男の子なのですが、他の子どもの輪に入ることが苦手に見えるところです。子供同士で仲良く一緒に遊んでほしいと思うことがよくあり、一人ぼつんと遊んでいることが多いの

で、それも個性かなとは思えるのですが、できれば、もう少し活発になって、皆の輪の中に入ることができたらなとも思っています。(6歳・男児)

・6歳の息子の母ですが、いつ頃から性教育をどのように伝えていったら良いか悩んでいます。(6歳・男児)

生徒が予想していた以上に、真剣なお悩みが多く、初めて知る「子育て」の大変さや、その現実に驚いていた様子であった。

そして、整理したお悩みについて、アポイントをとっていた保健師の方に紙面を通じてインタビューした。以下、保健師の方からいただいた助言である。

【仕事】

社会通念や、周りの方への気づかい、どうしても育児を優先してしまい、自分の気持ちが後回しになってモヤモヤしてしまうんですね。私も含めて、そういうジレンマを抱えて、何とかしたい、と思っている方はとても多いです。あなた自身が今回その気持ちを出せる、というのは素晴らしいことだと思います。これからも、ご自身の気持ち、思いは大切にしていってくださいね。小学生になったら、送迎もなくなるし、学童もあるので時間は作りやすくなります。今からできることを準備したり、思い切って踏み出せる 때가、近々来るかもしれません。というか作り出していきたいですね。ご家族にもその思いを伝え、一緒に環境づくりをしていくこともいいですね。

【ご飯】

食に関しては、本当に一人一人違いますね。兄弟でも、食べすぎるくらいだったり、食が細くて困ったり。集中できるかどうか、食欲の度合いか、好みのメニューか、ほかに興味があるのか。頑張る作身としては、気持ちよく食べてくれたら本当にうれしいし、しっかり食べて、体も丈夫になってくれたらうれしいですね。

園でのお弁当はどんな感じか聞いてみたり、集中できる環境を工夫したり、ごはんづくりからできるお手伝いをしてもらったり、食材の勉強を一緒にしたり。でも、ある程度食べてくれているなら、ご飯の時間は楽しい、親子で向き合える交流タイムとして、割り切ってしまうのも一つの考え方かもしれませんね。家族でのごはんタイムが楽しい時間になる、これが結構重要だったりします。

【性教育】

性教育は、3歳から、いや生まれたときから日々の生活の中でどうぞ。質問されたときにチャンスです。すぐに答えられなくても、わかった、後で一緒に勉強しようか、と絵本を読んだり。おすすめの本も色々ありますし、助産師が親子講座、子供のための講座も実施しています。

今回、生徒がこのテーマを探究するきっかけとなった児童虐待は、保護者が子育ての悩みを誰にも相談できず、孤立化してしまうことがその要因として挙げられる⁴。追い詰められるほどでなくても、育児を重荷に感じている保護者は少なくないだろう。そのような保護者に対して、この助言は共感的に、「悩んでいるのはあなただけではないですよ」という寄り添う姿勢がうかがえる。そして、子どもが小学校になれば時間的に余裕ができることで、仕事の時間を生み出すことができる。また、自分だけで抱えるのではなく、家族にも助けを願うといい、と。

食については、保護者が子育ての中で最も気遣うことの一つである。これについても、他の子と比べない、お手伝いなど、子どもと共同作業をすることで、食に関心をもたせる。また、食事に対しての見方、とらえ方を変えてみるなど、今まで多くの子どもや保護者と関わってきた経験があるからこそこの助言である。

性教育については、親同士で話づらい話題の一つかもしれないが、なかなか相談できる相手や場がないのが実情であろう。そのような中で子どもと話をするきっかけや、専門家に教えてもらうなど、外部とつながりをもつこ

とも紹介されている。

このように保健師の方からいただいた助言を、生徒が仲介することで、保護者の「安心できる子育ての場づくり」につながり、生徒が掲げたSDGsの目標の実現に一步近づくことが期待できる。

(4) 想定外のお悩みへの挑戦

保護者からのアンケートには、生徒にとって想定外のお悩みもあり、その一つに「子どもの遊び場」や「子どもが自発的に運動できる場所」を要望する声が複数あった。生徒は「これって、どうしたらいいの?」「私たちがすることかな?」と初めはためらっていた様子であったが、「おもしろそう」「やってみよう」ということで、問題解決に挑戦することになった。

まず、ネットで調べ、京都市役所の施設課に電話した。用件を伝えると、京都市役所建設局みどり管理事務所というところを紹介された。自分達で問い合わせ先を調べ、アポイントをとり、調整するということも、生徒にとって貴重な社会的体験となっている。また、中学生が電話すると、色々と丁寧に教えていただけることも多かった。

その後、京都市役所建設局みどり管理事務所にアポをとり、インタビューするために事務所を訪問した。担当者の方に、まず「公園の遊具が安全に使われるためにどんなことをしているか」を質問し、ボール遊びの規定、安全な遊具の設計や定期点検について教えていただいた。次に、「京都市内で幅広い年齢、兄弟で運動・スポーツを自発的にできる場所」について尋ねた。同市内にある「宝ヶ池公園子どもの楽園」を教えていただき、小さい子どもが遊具で遊ぶだけでなく、幅広い年齢層が楽しめるような「空間づくり」をしているという情報を得た。

生徒は後日、この宝ヶ池公園でフィールドワークを行った。平日であるにもかかわらず、子どもだけでなく大人も含め、多くの人達が利用していることに驚き、宝ヶ池公園の人気の理由について、次のように考察した。

- ・小さな子供たちが大きな遊具で遊べる。
- ・池や小川の周りを散策したり、ボートに乗ったり、乗馬ができる。
- ・自然豊かな広い公園で気分をリフレッシュできる。

また、生徒は宝ヶ池公園の持続可能な取り組みとして、定期的に公園の掃除をする「ご協力会」という地域のボランティア団体の活動を目にした。生徒はこのフィールドワークに行くまで、公園を使う側の立場でしか見ていなかったのが、このような地域の人達が活動する姿を見て、「これからの公園のあり方」について考えをめぐらせた。そして、公園は「利用するだけでなく、地域で子どもの遊び場を守る」ことが大切であるという最適解を見出すことができた。

(5) 活動を通して得たもの

附属幼稚園の保護者から寄せられたアンケートには、このようなアンケートを行った生徒への感謝や、中学生に意見を求めるようなものもあった。

- ・中学生のみならず、ありがとうございます。悩みを抱えていても、なかなかそれを人に話したりできない人が多いのでこのようにアンケートにして、定期的に伝えられる場とのつながりがあると安心です。よろしくお願いします。
- ・兄弟ゲンカしている時、見守ることにしています。子供たちで解決してほしいと思っていますが、どうすべきなのでしょう。中学生的な意見というか、気持ちも教えてほしいです。

年々、地域で色々な年代の人と交わる機会が少なくなり、またコロナ禍で学校行事が縮小され、学年を超えて生徒同士が関わる場も減っている。そのような中で、「自分が頼りにされている」という自己有用感を感じ、自分を頼りにしてくれている人のために、目を輝かせて活動しようとする生徒の姿が見られた。

また、今回は果たせなかったが、保護者からのアンケートには次のようなものもあった。

「駅にエレベーターがない事。幼稚園に行く通学路に通じる改札を出たところにもなく、みんなベビーカーのあげおろしが大変そう」このような本校を含む附属校園の最寄り駅のハード面に対する要望についても、今後の「宿題」として考えていこうとする姿が見られた。

今回の活動では、附属幼稚園の先生方と協働的に取り組みを模索し、幼稚園の保護者に自分達の思いを伝え、様々な質問や意見をいただいた。いわゆる「未知の状況」の中で、どうすればいいかを考え、社会の扉をたたき、専門家の方に教えていただくなどして、その最適解を導いた。また一連の活動を通して、互いに well-being がもたらされるように、「人のために活動する」という「人間性」が培われ、「学びに向かう動機づけ」も得られたのではないだろうか。

これらのことから、「(1)活動の概要」で挙げた「その行動でどう変えたいか」の「②子育てしている人の悩みを少しでも解決する」、「④子育てしている人と子育て支援をつなぐ」について、生徒らが思い描くビジョンの実現につなげることができた。

2. グループBの活動

(1) 活動の概要

前項と同様に、グループBの活動の概要について記す。

1. テーマ

「世界の人々に豊かな暮らしを」

2. SDGs の目標

- ・①貧困をなくそう ・②飢餓をなくそう ・④質の高い教育を ・⑥安全な水とトイレを世界中に
- ・⑩つくる責任つかう責任

3. ヒントを得た新聞記事

江崎グリコの「ポッキーも値上げ」という記事（2022年5月26日 読売新聞）

4. どんな行動をしたいか

「貧困をなくすための行動として、次の①～⑤を行う」

- ①食料が必要→自分達で食品ロスをなくしていく。→複数のスーパーで余った食品をどうしているかをインタビューし、食品ロスをなくすためのアイデアを聞く。
- ②きれいな水が必要→浄水場に行き、水を浄化するしくみを学ぶ。
- ③募金活動をする。
- ④子ども食堂で、聞く頻度やどんな人が利用しているか、費用の負担などについて聞く。
- ⑤アプリを開発する。

5. その行動でどう変えたいか

少しずつでも世界の人が豊かな暮らしを送れるようにする。

まず、「3. ヒントを得た記事」については、大手菓子メーカーが「ポッキーも値上げ」という小さなベタ記事に注目し、テーマ設定につなげていった。この記事からどのようなプロセスでテーマへと導いたかを、リーダーの生徒の感想をもとに考察する。

【④ 質の高い教育を】

まずポッキーにはチョコレートが必要。チョコレートの原料となるカカオはガーナでとられており、しかもそれを子どもが危険をおかして、命をかけてとっている。その子どもたちには仕事になっているので学校にいけない。また勉強するにしても仕事の休けい時間に自力で勉強しないとけないので、4※にしました。 ※4：SDGsの4番の目標（質の高い教育）

【⑩ 人や国の不平等をなくそう】

ガーナの子どもはカカオをとっているにも関わらず、チョコレートというものを知らず働いています。しかし、私たちはそんなことを知らず普段、普通にチョコレートに口をしています。私は、それは不平等だと思いました。

(チョコレート) ポッキーについて、チョコの原料がカカオであること、カカオの生産には開発途上国の児童労働の問題が関わっているという、既存の知識と合わせて考えを広げている。この事例を含め、中学生では新聞記事の中のキーワードを自分の知識と合わせて、問題の発見につなげていく姿が他の生徒にも見られた。

次に、「4. どんな行動をしたいか」については、「貧困をなくすための行動」として、5つの活動を計画した。「⑤アプリ開発」は、グループAと同様に断念したが、今後の需要は増えることが予想される。SNS上での安全性や閲覧及び使用の範囲などを考慮しながら、生徒が開発していける基盤を考えていくことを検討している。次項では、グループBが最も力を注いだ「③募金活動」について述べる。

(2) 募金活動の経緯と実際

グループBでは、最初、支援といえば「募金」ということで、活動を進めようとしていた。しかし、メンバーの一人が「募金だと何か違うかな。自分達が裕福であることを強調してしまうんじゃない？」とつぶやいたことで、どんな支援活動をするか、改めて考え直すことになった。「単にお金を集めるのではなく、何か自分達で動いて、飢餓で苦しんでいる子どもを支援しよう」と、募金以外の活動について調べ、校内でバザーを実施することにした。グループの中で誰もバザーの経験がなかったが、品物の条件を考え、日程の見通しを立て、企画書を作り、先生方に理解を得るところから始めた。

また、お知らせのチラシを全校生徒に配布したり、図4のようなポスターを校内に掲示したり、お昼の放送でアナウンスをしたりするなど、広報に力を入れた。活字や音声によるメディアを活用したことで、反響が大きく、生徒は「情報を送る」というメディアの利点に気づくことができた。

まず、1週間、登校時に校舎の入り口で、バザーで販売する品物を集めた(図5)。

次に、空いている部屋を借りて品物の陳列をした。どのように品物を並べるかについて、初めは品物ごとに置こうとしていたが、どの品物群を、どこに並べるかを考えるのに、実際に近くのコンビニの商品配置を見に行った。飲料やパン・弁当が店の奥にあったことから、それらを店の入り口付近に置いてしまうと、消費者はそれだけ買って店を出てしまうという、消費の「しくみ」に気づき、バザーでも目玉の商品やお買い得なものを奥に置くよう工夫していた。

品物の値段つけは、事前に元値が1000円以下で、10円から300円で販売することを条件として広報していたことから、この条件に沿って行った。複数人で「この商品はいくらであれば買ってもらえるか」「自分ならいくらなら買うか」など、相談しながら値段を決めていた(図6)。

また、代金の支払いについて、先生方にバザーの相談をしたときに、「その場で現金のやり取りはしない」という約束があったことから、生徒はどうすれば円滑かつ確実に代金を回収できるかを考えた。そして、バザー当

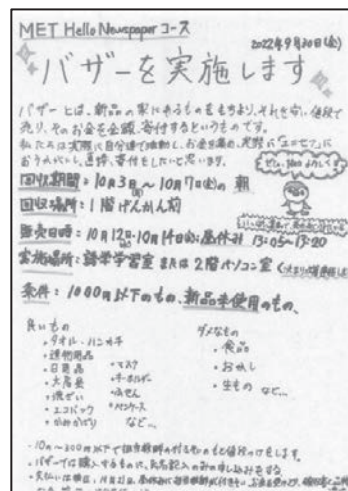


図4 バザー予告のポスター



図5 品物集めの様子



図6 値段つけの様子

日に買い手が代金と学年・氏名を封筒の表に書き、後日その封筒におつりがないように代金を入れて集めることにした。図 7 は、封筒づくりをボランティアの生徒と一緒にしているところである。

このようにしたことで、結果的に時間的にも効率よく、小銭ばかりであったが、間違いなく代金を回収することができた。何事も制約のない中で自由にできればいいが、社会に出て何らかの活動しようとするれば色々な制約が伴う。制約がある中で、どうすれば自分達がやりたいことができるか、また、制約を「活動をよりよくするための考える機会」ととらえて、軌道修正することも生徒の貴重な学びとなった。

当日の販売では、学年ごとに会計を設置して、品物を袋に入れる係、クラスと氏名、代金を一覧表に記入する係、誘導係など、自分達で「どうすれば人の流れが滞らず、みんなに気持ちよく買ってもらえるか」を考えて行動できた（図 8）。

バザー実施に向けての生徒の活動から、自主性や「未知の状況」に対応する思考力・判断力・表現力といった非認知能力が養われていったのではないかと推察する。また、社会や経済について考えることで、将来へのキャリア形成にもつながる活動になった。

(3) ユニセフ協会での気づき

バザーの収益金をどの組織に寄付するか、生徒が最も話し合いを重ねたことの一つである。ネットで検索すると、NPOの団体が多くヒットしたようだが、「信頼できるかわからない」「ネットの情報だけではわからない」ということで、多くの人が認知している日本ユニセフ協会に相談することにした。協会の方とは電話で連絡を取り、寄付したお金がどのように使われるかなどを確認した上で、寄付先に決定した。

バザー開催後、収益金を大阪ユニセフ協会（大阪市浪速区）に持参し、担当者の方からお話をうかがった。寄付したお金が、どのように子どもの支援になるのか。生徒は、一袋の栄養補助食品が 30 円であることを知り、「バザーで数十円のものを買ってくれることが、飢餓で苦しんでいる子どもの直接の支援につながっているんだ！」と、自分達が行ったバザーの意義を改めて実感していた（図 9）。

そして、担当者から短い紙切れを渡され、それを子どもの二の腕に巻いたとき、この細さになると命の危機にあるということを知り、そのあまりの細さに信じられない様子であった（図 10）。

また、ユニセフで学んだことが、それまでのグループ B の生徒の活動とつながることがあった。

例えば、「子どもがきれいな水がなく、伝染病になり、命を落とす」ことについて、それまでに浄水の過程について市内の浄水場を訪問し、学んでいたことから、「きれいな水」がいかに得がたいかの理解につながった。また、「子どもが栄養失調で命を落とす」ことについては、食品ロスを減らすための企業活動を知るために、スーパーにインタビューに行き、食料の有効活用についてアンテナを張っていたことから、ユニセフの対策に熱心に聞き入れることができた。



図 7 代金を入れる封筒づくりの様子



図 8 バザーの様子



図 9 栄養補助食品を手に取り、説明を聞く



図 10 子どもの腕の細さを知り、驚く

これらのことをふまえて、SDGs についての活動は個々に切り離されたものではなく、それらが有機的につながり、生徒の理解を促進させたり、新たなモチベーションとなることがわかった。そして SDGs の活動において、色々な「ひと」「こと」「もの」をつなげてとらえていくことの重要性が明らかになった。

このバザーは、活動をした生徒の社会貢献とともに、本校生徒の国際社会に向けての支援活動の種まきとなった。ユニセフからの帰り道に、リーダーの生徒が「これからいろいろできそうですね」と語る姿から、当事者である生徒の変化を見て取ることができた。

Ⅲ. まとめ

本コースの全てのグループの活動と、活動終了時に生徒が記述したふり返りをもとに、「総合的な学習の探究活動として、SDGs に取り組む意義」について整理する。

1. 生徒のふり返りの考察

次のふり返りは、前項で述べたグループBの生徒によるものである。SDGs の問題を解決するために、バザーをし、全校に啓発できたことやその達成感、ユニセフの方との出会いを通して、問題への認識が深まったこと、これらの学びを次への学びに生かしていきたいことなどが綴られている。

MET*の授業では、インタビューをしたり、アンケートをしたり、また、バザーを実施し、普通ではできないような貴重な経験をたくさんすることができた。そして、特に印象に残った活動は、バザーをしてお金をユニセフに寄付したことで、とても意味のある行動ができたと思う。自らが発案し、自ら行動し、自ら呼びかけることが大切だとこの活動を通して感じた。また、バザーを実施した時とても多くの人たちが来てくださってやりがいを感じた。ユニセフでお話を聞いたときには、改めて世界の中でもこんなに不平等が大きいんだと実感した。このMETで学んだことをこれからの生活に生かしていきたいと思う。 ※MET…本校の総合的な学習の名称

2. 「総合的な学習の探究活動として、SDGs に取り組む意義」と今後の展望

- ①社会の抽象的な問題を具体化し、身に付けた個々の知識や技能を駆動させながら課題解決に導くことができる。
- ②活動を通して学んだ探究のスキルや学びを別の学習や日常の場面で生かそうとしている。
- ③リアルな状況の中で、試行錯誤しながら、協働的に最適解を生み出すことができる。
- ④社会の当事者や専門家と関わったり、リアルな状況に対応する中でキャリアを形成したり、社会参画することができる。
- ⑤「人の役に立っている」という充実感が得られる。

①②は「生きて働く知識・技能」、③は「未知な状況に対応できる思考力・判断力・表現力」、④はキャリアの形成、⑤は自己肯定感とともに、誰のために、何をしようという前向きで他者との共生を大切にす姿勢、すなわち、「人間性を高め、学びに向かう力」を養うことができる。

これより、生徒にとって「総合的な学習における SDGs の活動」は、昨今の教育界で「求められる力」に応じた資質・能力の育成に資するだけでなく、自らの学びを耕し、仲間と協働的に社会を変えていこうとする姿そのものを見取ることができた。また、その学びの奥行きと、活動の可能性を支援者として見て取ることができた。

【注】

1. 「令和の日本型教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～中央教育審議会答申（R4. 1. 26）
2. 同上
3. Society5.0 に向けた人材育成に関わる大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース（H30. 6. 5）
4. 厚生労働省『子ども虐待対応の手引き』（H19. 1. 23）

本実践にあたり、ご協力を賜りました京都市役所建設局みどり管理事務所の担当者様、附属幼稚園の檀山ゆかり前園長先生ならびに先生方、附属幼稚園の保護者の皆様、その他多くの事業所、施設の皆様に心より御礼申し上げます。